

オスカー・ワイルドの童話とパラドックス

貝 嶋 崇
(比治山大学助教授)

Oscar Wilde の童話について、パラドックスの観点から捉えなおしてみる。これは、ワイルドの他の作品にもいえることだが、ワイルドが書いた作品のもつ魅力を味わう上で、不可欠の作業だといえる。

ここでは特に、「美」と「醜」に関するパラドックスの視点から童話をみていくことにする。すると、その中にワイルド独自の芸術論が折り込まれていることが理解できる。さらに、また、美醜のコントラストを巧みに利用しながら、それ自体が密接にその童話のテーマと結びついている点に気付かされる。

まず、1888年に出版された *The Happy Prince and Other Tales* のなかの *The Happy Prince* の最後の方で、様々な貧しき人々に、自分の持っている宝石や金箔などをあげた後の無惨な姿の像を見て、大学の教授がこう嘆く。

「もう彼は、美しくないで、役にも立たない」

ここで、美と実用性とを関連づける考え方があらわれているが、これは、アイロニーと解釈してさしつかえないもので、じつは、作者はその考え方に批判的なのである。

これは、ワイルドの恩師 John Ruskin の *The Stones of Venice* の中の言葉を思い起こさせる。

「世の中で最も美しいものは最も無用の代物なのだということを忘れないで欲しい。

孔雀や百合の花をみるとおわかりのとおり」

このように、この童話はラスキンの言葉を暗示させながら、芸術の無用論を巧みに折り込んでいるのである。

さらには、美しい王子の像が慈愛に満ちた自己犠牲をすることで多くの人々を救うが、その一方で、王子自身はこの世では何の正当な評価も受けず、醜くなって捨てられる。そして最後に、神がその行為を正しく評価するのである。

そこには、「美」と「醜」の転換が巧みに折り込まれている。つまり、たいへん美しい王子の像が、自己犠牲という貴い行為をすることにより意外にも醜く変身してしまうというパラドックシカルなストーリーである。「美」と「醜」の強いコントラストを利用して、「美」とは何かをパラドックシカルに訴えかけてくるのである。

こうした、「美」と「醜」の転換をストーリーに持つ童話は他にも 'The Young King,'

'*The Birthday of the Infanta*,' 'The Star-Child' などがあげられる。'The Young King' では、戴冠式の時に身につける美しい衣服や宝石のために、貧しいもの達の命がけの苦勞があることを夢で知り、若い王はその服を着るのを拒む。また、'The Birthday of the Infanta' では、王女は外面の美しさとは裏腹に、冷たい心を持ち、一方で、小びとは醜い外見はしているものの大変繊細で優しい心をしている。さらに、'The Star-Child' では、美しい顔をしている星の子が、醜い母を母として認めなかったため、その顔が醜く変化してしまう。それから、最後には命と引換に老人を救うことで、もとの美しい顔を取り戻し、本当の王子であることがわかる。

このように、童話のなかで、「美」と「醜」のコントラストが強調されその童話が印象的にみえる一方で、美と醜がパラドックシカルに表現されているのがわかった。では、ワイルドは、そうしたつらい経験をすることで高められた美を崇拝しているのかということそう単純には言い切れない。もし、そう単純であれば、例えば、「幸福な王子」で、最後の場面はもう少し強調されて、詳しく描かれるべきであったろう。

むしろ、この童話群のなかでは、一人の人間が「美」と「醜」をあわせ持っている矛盾した現実がそのままの形で提示されている。従って、'The Star-Child' を除いて、ほかの大部分の童話では現実的なストーリー展開をさせている。

こうして、見てくると、ワイルドの童話自体が様々な矛盾を含んでいることがわかる。

ワイルドは、アンデルセンは子どもたちのためではなく、自分のために童話を書いたと明言している。これは、アンデルセンを引き合いにだしてはいるもののワイルド自身が、童話をどう捉えているかを示しているといえるだろう。

「美」と「醜」のパラドックスに関しては、W. Shakespeare の *Macbeth* のなかにも、登場する魔女の台詞がある。

Fair is foul, and foul is fair.

「綺麗はきたない。逆もまた真なり」

これは、「美」と「醜」の問題がそう簡単に割り切れるものではないということ。さらには、「美」は、それ自体に「醜」を孕んでいることをパラドックスを用いることで、雄弁に物語っている。ワイルドは、このパラドックスを童話の中に、巧みに織り込んだのである。